

SDGs×ESD レポート Vol. 18

ESD は (Education for Sustainable Development) 略称で「未来を変える人づくり」を意味します。



発行：NPO法人持続可能な開発のための教育推進会議（ESD-J）

石川県能登地方を中心とする地震から半年以上が経ちました。今年度の車座トークでは、能登町において地域ぐるみで取り組んできた海洋教育の実践事例と海洋教育を通じたまちの持続可能性、レジリエンス向上等について浦田慎氏にお話し頂きました。参加者の皆様には、今後の活動のヒントとなるエッセンスが多く含まれており、とても示唆に富んだお話でした。
(事務局・横田)

「縣市環境教育人員（環教大使）国際交流学習」訪日ミッション受け入れ報告



2024年5月29日～6月4日に台湾教育部によるESDに関する訪日研修団（主として各県市の学校教員、大学関係者総勢27名）をお迎えし、日本国内におけるESDの実践状況の視察を行うとともに、日本・台湾小中学校ESD/環境教育シンポジウム（以下シンポジウム）を開催しました。

- 5月29日：上野公園周辺施設の視察、日本側関係者との打ち合わせ
- 5月30日：多摩市立連光寺小学校、同和田中学校視察、多摩市教育委員会との意見交換
- 5月31日：ユネスコ・アジア文化センター、地球環境パートナーシッププラザでの研修
- 6月1日：新渡戸文化高等学校視察、シンポジウム開催
- 6月2日：横浜自然観察の森視察
- 6月3日：日本科学未来館視察



■ 受け入れの背景

ESD-Jと中華民国環境教育学会（CSEE）との交流は、2021年に小玉 敏也理事がCSEEの招待によりESDに関する講演を行ったことに始まりました。昨年、CSEEの招待によりESD-Jから3名が台湾を訪問し、CSEEの学会で講演を行うとともに、台湾における環境教育、ESDの現状について視察しました。その際、CSEEとESD-Jとの連携協力協定の署名式典を行うとともに、本訪日研修への支援に合意しました。

■ 日本・台湾 小中学校ESD/環境教育シンポジウムの概要（参加者59名）

まず、主催者を代表して小玉 敏也理事から、今回の台湾教育関係者の訪問の趣旨、シンポジウムの概要等を述べ、福井 智紀氏（日本環境教育学会研究委員長）から、シンポジウムの趣旨と第一部の講演内容と講師の紹介がありました。

第一部：日本のESD・環境教育の経験共有

司会 福井 智紀氏

● 棚橋 乾氏（全国小中学校環境教育研究会顧問）が学習指導要領と探究的学習の特徴を説明し、宮城県の小学校と東京都の中学校の事例を引用しながら、日本のESDの優良事例を紹介しました。

● ニノ宮リム さち氏（立教大学教授）が、市民が社会の諸課題（人権・共生・環境等）を解決していく上で、ESDが重要な役割を担うことを指摘し、社会教育において住民が主体的な学習を切り拓く重要性を述べました。

● 小林 知子氏（公益財団法人消費者教育支援センター主任研究員）が、気候変動問題に「消費者市民」の立場からアプローチする授業プログラムに関する報告をしました。

第二部：台湾のNEEDの経験共有

司会 萩原 豪氏（日本環境教育学会国際交流委員）

● 許 毅璿氏（中華民国環境教育学会理事）が、台湾で推進する①NEED（New-Generation Environmental Education）推進の背景、②NEED推進の枠組みと実行戦略、③NEEDの現状と未来展望の3点について講演しました。

● 次に林 俊傑氏（廉使國民小學校長）、施 皇羽氏（彰化縣同安國小學校長）、唐 欣怡氏（宜蘭県政府学校環境教育センター）からの報告があり、林氏と施氏は小学校での行政・企業・民間団体等が連携・協働したNEEDの取り組みを紹介し、唐氏は、社会教育施設を拠点とした地域ぐるみの環境教育を報告しました。

閉会の挨拶

最後に、降旗 信一氏（日本環境教育学会会長）と阿部 治氏（ESD-J相談役）、許 毅璿氏から閉会の挨拶があり、本イベント開催の意義が確認されました。

アンケートに対する回答は15名と限定的でしたが、大変良かったが12名、良かったが3名と好評でした。

■ 総括（所見）（プロジェクト総括 小玉 敏也氏）

今回のミッションによって、以下の3つの成果を生み出すことができましたと考えています。

第一は、「日本のESD推進の実態を多面的に理解してもらえた」ことです。今回のミッションは、①日本の小・中・高校のESD実践、②政府・NGOによるESD推進の仕組み、③ESDに活用可能な社会教育施設を紹介することでしたが、

訪問団から、ESD推進のための財政的支援や奨励策、外部団体との連携のあり方に関する質問が多かったことから、本プログラムが多面的な理解を促す一定の効果があったものと推察されます。

第二は、「ESD-J自身が、〈日本のESDの現在〉をとらえ直す良い機会になった」ことです。訪問団に同行し集中的に視察することで、首都圏という限定された空間でしたが、ESDの全体像を把握し、その特質と課題を把握できたように思います。これは、今後の私達の活動にも大きな学びと収穫になりました。

第三は、「訪問団との交流によって、日本のESD関係者の刺激になった」ことです。現在、日本のESDは、ユネスコスクールの加盟数の鈍化、政府の政策的・財政的支援の変化、関与する関係者の減少と高齢化等の問題によって、ある種の停滞期に入っていますが、今回の交流からESDを学ぶ意欲、議論する時の熱気が十分に伝わってきて、もう一度日本のESDを強く推進していく意欲を得ることができました。

以上の成果を踏まえ、今回の訪問団受け入れを一過性のイベントにするのではなく、中長期的な交流の契機としたいです。



報告詳細は以下のリンクをご覧ください！

[\(https://www.esd-j.org/report_category/international/\)](https://www.esd-j.org/report_category/international/)

ESD-J 総会報告 & 新理事紹介

【総会実施報告】

2024年6月22日（土）にオンラインで開催し、全国からの出席は61名（うち委任状提出が35名）でした。特に2024年度の事業計画と理事体制、並びに組織基盤強化に向けた主要課題と検討結果に力点を置いて説明されました。

2024-2025年度の代表理事は、鈴木 克徳理事が担うこととなり、副代表理事は、浅井 孝司理事、池田 満之理事が担うこととなりました。

【新理事紹介】

6月30日をもって鳥屋尾 健理事、松浦 英人理事、與儀 滝太理事が退任され、下記の通り、4名の新任理事が着任されましたのでご紹介いたします。

松田 剛史理事【北海道地方担当】



藤女子大学人間生活学部人間生活学科准教授。現在は教育と社会連携を基盤として、企業や行政、NPOなどと連携したPBLによる学びの場を提供しています。また、開発教育、環境教育など多様な体験学習の理論やワークショップの手法を学び、学校・社会・組織内における研修やミーティングなどの場で活かせる協同的な学習機会の設定や相互連携のあり方について追究しています。

新名 阿津子理事【四国地方担当】



公立鳥取環境大学、伊豆半島ジオパーク推進協議会、東北公益文科大学などを経て、現在、高知大学人文社会科学部准教授。四国地方ESD活動支援センター運営委員、日本ジオパーク委員会委員、ユネスコ世界ジオパーク現地審査員、日本地理学会ジオパーク対応委員会委員。ESD-Jでは四国地域のネットワーク化やジオパークとのさらなる連携を進めていきたいです。

増田 直広理事【関東地方担当】



鶴見大学短期大学部教員。1997年より公益財団法人キープ協会にて自然体験型環境教育の指導や指導者養成事業、CSR事業、環境教育施設の運営などを担当した後、2021年より現職。環境教育やESDの視点を持つ「保育者インタープリター」の養成に従事し、近年は、「自然保育者養成」や「持続可能な地域づくりにおけるインタープリテーションの役割」に関する実践・研究に取り組んでいます。

安田 昌則理事【九州・沖縄地方担当】



公立小学校教員・教頭・校長の27年間、指導主事・教育長の教育行政17年間、学校教育関係に44年間勤務。教育長時代に全公立の小・中・特別支援学校がユネスコスクールに加盟し、市をあげてESD/SDGsを推進しました。大牟田ESDコンソーシアムの設立、大牟田RCEへの加盟等に努めました。今後、学校・諸団体と連携し持続可能な社会を創りゆく人材育成に尽力していきたいです。

 理事プロフィール詳細は以下リンクをご覧ください！
(<https://www.esd-j.org/aboutus/organization/>)

ESD-J 車座トーク

『能登半島地震の復興 里海からの学びと地域』 報告



◆2024年6月22日(土)
14:00～16:00(参加者28名)
ゲストスピーカーに浦田 慎氏(一社)能登里海教育研究所 主幹研究員)をお迎えし、「被災状況にある能登の地域や人々が抱えている課題を『じぶんごと』とし、わたしにできることを学びあう場をもつこと」を目的に開催

しました。

<浦田氏のご講演>

能登町の面する海は環境と資源に恵まれ学びの場となっ

てきましたが、少子高齢化により子どもが海に行くことが減り、漁業の後継者になつたり、海に関心を持つ子どもが減つたりしています。2015年に能登町の創生総合戦略として、まちぐるみで子どもたちの地元に対する誇りと愛着心を醸成することが示され、能登里海教育研究所は、学校教育における海洋教育の支援を行うことで、地域社会の持続性に貢献しようと考えました。そして、外部の指導者と学校の先生方が協力して子どもたちを主体とした魅力的なプログラムを開発する海洋教育を実践してきました。

2024年1月の能登半島地震の被害により、教育現場には様々な影響が出ました。そんなさなかにも、教育活動は継続されました。地震発生時には津波がすぐに来たにも関わらず、

津波による死者は非常に少なかったと報道されましたが、近所で連絡を取り合って避難する動きがあったと聞いています。災害時こそ日頃からの密なコミュニケーション、地域におけるつながりが活きると思います。地域と連携した海洋教育は学校教育の取り組みとして実施してきたわけですが、地域社会のレジ

が抱える問題に向き合う「問題解決型」の探究に加えて、海や地域等の可能性に向き合う「可能性拡張型」の探究が必要となる

③「地域の教育資源としての価値」への転換：豊かな能登の自然や文化、多様な地域遺産を誇れる教育資源として価値付け直すことが重要

これら3つの転換が震災からのレジリエンスであり、その先のイノベーションにもなると思いました。

<新海理事の所感>



「能登の自然、里海、人々の営みを教材にした学びこそが、『能登への愛着』を育む。地震が発生して大変な状況にあっても『能登に学び、能登と生きている』子どもたちや人々がいる。一緒に学び続けていこう。一緒に行動し

続けていこう」。浦田氏からそのようなメッセージを感覚的に受けとることができました。「わたしの町はわたしがつくる。」能登での学びを「じぶんごと」として受けとめ、「わたしのまち」に活かす。つながりながら学びあい、行動する。それこそが「ESD」であり、ESD-Jの役割を再考する時間となりました。



報告詳細は以下のリンクをご覧ください！

(https://www.esd-j.org/report/2024kurumaza_noto/)

令和6年度環境保全功労者表彰を棚橋乾さん（全国小中学校環境教育研究会 顧問）が受賞されました。おめでとうございます！

【棚橋さんの受賞をお祝いする会】
（全国小中学校環境教育研究会・GEOC・JEEFの共催）
2024年8月21日（水）
第1部（講演会）：18時00分～19時00分
第2部（交流会）：19時30分～21時30分
お申込：<https://forms.gle/wReA1GYNZ8wpwn3f7>



他地域での海洋教育支援の継続

2月5日には明星大学和田薫先生と協力し、八王子市立横山中学校でスルメイカの観察授業を予定通り実施。



- ・被災地でも、支援を受けるだけでなく何か役割を果たすことが活力になる場合もある。
- ・被災地への関心が、より積極的な学びへのきっかけに？ 海の資源がどうやって利用可能となっているか、それが地域の人たちの力でどのように支えられているか再認識。

リエンスの要にもなると感じました。

<淺野理事の所感>



今回のお話は、以下の「3つの転換」がキーワードになっていたと思います。

①「地域と共にある学校」への転換：育てたい子ども像と目指したい教育のビジョンを地域と学校で共有し、目標の実現に向けて協働していく仕組み

働していく仕組み

②「新たな探究的な学び」への転換：自然環境や地域社会

◆編集後記：ラムサール条約第14回締約国会議において、「公教育に湿地教育を組み込む（決議XIV.11）」が採択されました。韓国では27の小・中学校から成る「韓国湿地学校ネットワーク（KWSN）」が編成され、「アジア湿地学校ネットワーク（AWSN）」構想を提案しました。東アジア・ラムサール地域センター（RRC-EA）はAWSNと連携して、7月16日～18日にバンコクで、AWSN準備会議を開催しました。日本の参加者は一人でしたので、ESD-Jを通じて知り合った北海道野村中学校、宮城県大崎市大貫小学校、東京都多摩市連光寺小学校での活動事例を代理で発表しました。ご協力いただいた皆様、ありがとうございました。（事務局・後藤）



特定非営利活動法人持続可能な開発のための教育推進会議

〒116-0013 東京都荒川区西日暮里 5-38-5 日能研ビル 201

TEL：03-5834-2061 FAX：03-5834-2062 MAIL：jimukyoku@esd-j.org

